

## 金融メカニズム編 第4週

### 銀行の歯科医院を見る目

#### ■金融環境の激変

##### 1. 金融期間の体質転換

壊滅的なモノ不足からスタートした戦後の我が国は、「護送船団」と呼ばれる金融体制を中心に復興を遂げて行きます。国家の保護を受けた金融機関は、大手も中小も絶対に潰れることがないという安心感のもとに広く国民から預金として集めた資金を、多くの企業に融資することにより経済の復興と成長を支える役割を担ってきました。

国民個人の側から見れば、物質的な豊かさからは程遠かった当時の生活の中で、それぞれが「労働」と「貯蓄」という両面から国家の復興と成長に寄与してきたとも言えます。そのように見て参りますと、戦勝国を追い越すほどの成長を遂げた80年代半ばまでの40年間は、「勤勉」「節約」という日本人が民族的資質として持っている美点が、戦中戦後を通じ最も有効に作用した時代であったのかもしれませんが。

この貧しくも輝かしい40年を支えた体制は、まさに安定した金融システムによって構築され育てられて来たわけですが、その背景には右肩上がりが永遠に続くことを疑われなかった「土地神話」が存在します。本来、企業に対する事業資金の融資は、事業の収益性や成長性をベースに行なわれるべきですが、戦後一貫して上昇し続ける地価は何にも増して成長性があり、また換金性も高く、土地担保の範囲内であれば、焦げ付きが発生しても担保処分によって回収できるとの判断